

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 10 日現在

機関番号：27104

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370024

研究課題名(和文)「まちの物語論」構築のための記憶・忘却・喪失・再生に関する現象学的解釈学的研究

研究課題名(英文) Phenomenological and hermeneutic research on memory, oblivion, loss and regeneration for the construction of "the theory of the city's story"

研究代表者

神谷 英二 (KAMIYA, Eiji)

福岡県立大学・人間社会学部・教授

研究者番号：40316162

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：個別の自我と共同体における記憶、忘却、喪失、再生について、その全体像を現象学と解釈学の理論を応用して明らかにした。その過程で、共同体を共時的なつながりとしてだけでなく、世代性を踏まえた発生と消滅の弁証法的運動として記述する理論的基礎が得られた。それにより、まちづくりの基礎となり得る「まちの物語」のもとであるエクリチュールとイマージュなどの断片を「小さな物語」として再構成する理論構築に関する哲学的基礎が築かれた。

研究成果の概要(英文)：The whole picture of memory, oblivion, loss and regeneration in individual ego and community was clarified by applying the theory of phenomenology and hermeneutics. In the process, we obtained a theoretical foundation describing the community not only as a synchronous connection but also as a dialectical movement of occurrence and annihilation based on generations. This created a philosophical basis for the theoretical construction of reconstructing fragments such as 'writing' and 'image' as "small stories" that are the sources of the "story of the city" that can form the foundation of community development.

研究分野：現代哲学(現象学、解釈学)

キーワード：現象学 解釈学 ベンヤミン 集合的記憶 物語 まちづくり 固有名 弁証法的形象

1. 研究開始当初の背景

(1)現在、日本の地方自治の現場では、「まちづくり」という曖昧な言葉が、魔法の言葉のように語られ続けている。いわゆる箱物行政も、平成の大合併も、震災の復興も、B級グルメのイベントも、子育て支援も、すべては「まちづくり」の言葉とともに肯定され、進められてゆく。しかしながら、その際、「このまちのアイデンティティは何か」「このまちの継承すべき伝統は何か」「このまちの失われた物語は何か」といった問いに応えつつ、仕事が進められることは極めて稀である。

研究代表者(神谷)は、哲学の研究教育と並行して、この十数年間、地方自治体の現場でまちづくりの実務に携わってきた。こうした活動を通じて、それぞれの自治体固有の、住民に身近な「まちの物語」を書き、読み、語ることが強く求められながらも、実際には全国どこでも使えるような紋切型の表現と文体によって、物語と未来が語られているという状況に直面してきた。

例えば、神谷が策定に関わった、福岡県直方市第5次総合計画における「まちの将来像」は「市民一人ひとりが輝き笑顔つながるまち」である。これは神谷がコーディネーターを務めた「ハートフルのおがた市民会議」での市民による討議を経て設定されたものではある。しかしながら、ここには直方市固有の「まちの物語」はほとんど反映されておらず、これをどれだけ市民が自分のまちの将来像と思えるのであろうか。神谷自身、こうした経験を通じて「まちの物語論」がいかに必要かを痛感している。

また、地方自治論の研究者、および自治体マーケティングや地域ブランド創出に関わる研究者や実務家からもまちづくりにおける物語の重要性はしばしば指摘されているものの、普遍的な理論の構築へと向かう動きは見られない。

こうしたまちづくりにおけるエクリチュールと物語の貧困が最も顕著に現れたのが、まちの名の抹消という行為である。これまで我が国では、市町村合併や住所表記の変更とともに多くのまちの名が捨てられていった。長年、親密な固有名としてアウラを発しつつ、それぞれのまちで日々語られ、書かれていた名が突然消滅する。名の喪失は、「まちの物語」の忘却と喪失をもたらし可能性が高い。

(2)以上のような、まちづくりの実務における課題発見とともに、神谷がこの8年間取り組んできた、アンリ、ベンヤミン、ベルクソン、リクールを手がかりとした記憶と集合的記憶に関する研究からも、今回の研究課題につながる多くの学術的発見があった。

まず、そもそも哲学と哲学者が都市やまちについて語ることが極めて少なく、精緻な理論的探究は皆無であることが明らかとなった。こうしたなかで、ベンヤミンは例外的な思索者である。しかし、パサーージュ論が未完

成に終わったこともあり、ベンヤミンの「まちの物語論」となり得る萌芽は、膨大な断片や遺稿とともに、いわば瓦礫のまま残された。

次に、集合的記憶に対する固有名の重要性が明らかとなった。特に「まちの名」という固有名そのものがもつアウラについて探究することが不可避である。

また、集合的記憶の忘却、喪失、不在、余白といった非存在に関わる一連の現象を歴史哲学として記述することの重要性も明らかとなってきた。

最後に、研究代表者は2008年以来、応用現象学の一分野として、「課題解決現象学」の構想を提唱しており、「まちの物語論」構築は、この構想にとって重要な研究課題であると考えている。

2. 研究の目的

個別の自我と共同体における記憶、忘却、喪失、再生について、その全体像を現象学と解釈学の理論を応用して明らかにする。その過程で、共同体を共時的なつながりとしてだけではなく、世代性を踏まえた発生と消滅の弁証法的運動として記述することをめざす。さらにそれを踏まえて、まちづくりの基盤となり得る「まちの物語」のもととなる断片を収集し、住民に身近な「小さな物語」として再構成する理論構築に関する哲学的基礎を築く。

3. 研究の方法

(1)本研究は、文献精査と資料収集を並行して進め、その成果をもとに理論構築を行う。哲学関係の先行研究としては、リクールが『時間と物語』と『他者のような自己自身』で提示した「物語的自己同一性」概念と、フッサールによる世代性の発生に関する研究とそれを発展させたスタインボックによる世代発生的現象学が重要な理論的基礎となる。また、ベンヤミン『パサーージュ論』におけるパサーージュに関する断片を「まちの物語」へと昇華させんとする試みとその普遍性に関して検証することも重要な作業課題である。

(2)こうした文献研究とともに、「まちの物語」に繋がり得るエクリチュールとイメージの収集を行い、これらの解釈と理論構築との間を往復しつつ研究を進める。

4. 研究成果

(1)平成25年度は、本研究課題の準備段階から取り組んでいた「固有名と記憶」に関する研究を継続した。

「固有名は人間の記憶とどのように関わっているのか。固有名は集合的記憶にどのような影響を与えているのか。」本研究は、ベンヤミンの言語論と記憶論を主要な理論的手がかりに、「固有名と記憶」について思索を進め、これらの問いに答えるものである。当該年度の研究成果として、「固有名と記憶」研究全

体の第2部にあたる論文を公刊した。そこでは、固有名のうち「まちの名」に焦点を絞って論究した。まず、遊歩者がまちの名の磁力に惹きつけられるあり方を描写した上で、レヴィナスのテキスト読解における「懇請」の概念を援用し、アウラにも言及しながら、その言語論的な原理を解明した。その結果、まちの名の磁力が世界の根源への門でもあることを示した。その上で、まちの名が弁証法的形象であることを示し、「歴史の原現象」としての、その歴史性を明らかにした。

(2) 前年度の研究により、今後の具体的な探究課題が明らかとなった。(a)ベンヤミンが人名から創造した架空の街路名について考察することで、まちの名と人の名が相互浸透することにより、個人的記憶と集合的記憶に何をもたらしているかを解明すること。(b)「アゲシラウス・サントデル」という名を手がかりに、原理的に想起し得ない記憶について考察すること。

平成26年度は、これらに取り組む準備作業として、「文化的記憶」を巡るアライダ・アスマンの研究を分析した。彼女は、単数形の歴史(「大きな物語」という抽象的なシンテーゼに、今日では多種多様な、互いに矛盾し合う複数の記憶が対峙していると考えている。そして、これらの記憶は社会的承認を求めて自らの権利を主張していると言う。この多種多様な記憶の承認という問題こそ、まちに関する断片的なエクリチュールとイメージから「小さな物語」としての「まちの物語」が作りうるのか否かという研究課題に強く関わっている。この観点から、具体例としてヴィシー政権下のパリにおけるユダヤ人の行動を歴史的記録と文学的記述をテキストとして分析することが重要であるとの見通しを得た。

これと並行して、ハイデガーの『存在と時間』における解釈学的現象学の理論、特に「気遣い」と「時間性」をベースに、個人の記憶を表出する語りを分析する方法の開発を進めた。物語的自己同一性を「まちの物語」に適用する際に、個人の記憶を「まちの物語」の「部分」として解釈し、「全体」としての「まちの物語」のなかに組み込むことが必要となるとの着想からこの取組を開始した。

(3)前年度までの研究成果を踏まえ、平成27年度は、共同体における集合的記憶の忘却・喪失・再生について、「ベルリン」という固有名を手がかりに探究するため、ベルリンにある「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」と「ベルリン・ユダヤ博物館」を導きの糸として、瓦礫と廃墟を記憶する行為がどのような空間と時間において生じているのか、そしてこうした空間で誰かを何かを記憶し記念することが可能なのかを明らかにする作業を開始した。そこでの議論の順序として、まずコメモラシオンについて考

るために有力な手がかりとなるピエール・ノラの「記憶の場」とアライダ・アスマンとヤン・アスマンの「文化的記憶」について概観し、「記念の場所」についても整理した。次に、記念の場所が置かれた空間を論じ、この空間をジル・ドゥルーズの概念を応用して「消尽した空間」として描き出した。その上で、こうした空間がいかにしてコメモラシオンとしての記念の場所になり得るのかをベンヤミンの「弁証法的形象」と「固有名」を手がかりに解明した。

(4)最終年度の研究として、デリダの「灰」を忘却から救出することができるかどうかを解明する探究を行った。具体的には、まず、灰を忘却から救出しようとするときに現出する問題系を整理し、俯瞰する作業を進めた。デリダの描写する灰の存在様式を見定めた上で、「灰それ自体を忘却するとはいかなることか」を問いに付した。研究の結果、灰は「自らを与えつつ、存在の彼方にある存在」であり、「忘却の忘却」であることが明らかとなった。さらに、ドゥルーズの「消尽したもの」とナンシーの「記憶しえない記憶」の議論を参照しつつ、灰を忘却することの意味を探究した。その結果、灰を忘却することは、絶対的な非-回帰の形象を喪失することであり、それによって、日付と固有名をもつあらゆる経験は特異性の中に閉じ込められ、いかなる反復も不可能になり、すべての経験は我有化の回路に閉じ込められることになることが解明された。

(5)こうした研究により、個別の自我と共同体における記憶、忘却、喪失、再生について、その全体像を現象学と解釈学の理論を応用して明らかにした。その過程で、共同体を共時的なつながりとしてだけでなく、世代性を踏まえた発生と消滅の弁証法的運動として記述する理論的基礎が得られた。それにより、まちづくりの基礎となり得る「まちの物語」のもとであるエクリチュールとイメージなどの断片を「小さな物語」として再構成する理論構築に関する哲学的基礎が築かれた。

(6)こうした研究成果を踏まえて、次の段階として、個別の都市における記憶を含む、詩、日記、書簡、断章を手がかりとして、モザイクの思考により、そのエクリチュールのなかに、ベンヤミンの言う「弁証法的形象」を発見する方法を構築することが必要となる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

神谷英二、固有名と記憶(2)、福岡県立大学人間社会学部紀要、査読無、Vol.22、No.2、2014、pp.63-76

神谷英二、瓦礫の記憶論のために、福岡県立大学人間社会学部紀要、査読無、Vol.24、

No.2、2016、pp.77-90、
<http://id.nii.ac.jp/1268/00000046/>

神谷英二、灰を忘却から救出するためのメモランダム、福岡県立大学人間社会学部紀要、査読無、Vol.25、No.2、2017、pp.59-68、
<http://id.nii.ac.jp/1268/00000104/>

新木真理子、神谷英二、東玲子、吉原悦子、丸山泰子、要介護高齢者の気遣いの世界：祖父母的ジェネラティブイティの源を探る、西南女学院大学紀要、査読有、Vol.21、2017、pp.1-8、
<http://id.nii.ac.jp/1536/00000006/>

[学会発表](計1件)

新木真理子、神谷英二、東玲子、吉原悦子、丸山泰子、要介護高齢者の「気遣い」に着目した介入研究の可能性を探る：ハイデガーの解釈学的現象学を基盤として、日本看護科学学会第34回学術集会・交流集会、2014年11月30日、名古屋国際会議場(愛知県名古屋市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

神谷 英二 (KAMIYA, Eiji)
福岡県立大学・人間社会学部・教授
研究者番号：40316162